

小西甚一著「俳句の世界」講談社学術文庫、講談社 1995 年 1 月 10 日刊を読む

三千の俳句を^{けみ かき}閑し柿二つ

1. わたくしには、

^{いく}幾たびも雪の深さを^{たづ}尋ねけり

子規

が、ずっとしみじみ迫ってくる。雪の日の深い寂しさ、病人特有の神経が「不言の言」として表現されたもので、これならりっぱな第一藝術だと承知できる。バイチマン女史は、この句について“Childishly excited, he asks again and again how much snow has fallen.”と説明する。尋ねかたが childishly excited であるかどうかは問題だが、沈痛な語調で尋ねたとしても、その意識の底に童心が潜むことは認められよう。子どもの時ほど、雪の中を歩いてみる純真な愉しさを経験することはないからである。鋭い指摘だといってよい。

2. ^{うぐいす}飯たかぬ朝の 鶯 鳴きにけり

^{の わ き}野分の夜書よむ心定まらず

行く秋のひるめし食へば寒くなる

などにも、それがある。この当時の句について、バイチマン女史は、子規の「写生」に対する定義（病牀六尺』所見）と実作とが適合してきたことを認めながらも、実景・実事の極度に単純な描写ほど表現効果が豊かなのだとする子規の写生理論よりも実作がいくらか上廻ること、それは底深く潜められた主観性に裏づけられること、写生論は子規自身の実作とかならずしも一致しないこと等を示す。これも同感である。

3. 三十年に、有名な、

三千の俳句を^{けみ かき}閑し柿二つ

子規

がある。むかし、学期試験で千枚ほどの答案を調べたあと、よくこの句を想起したものである。若い頃のわたくしだって、千枚の答案は楽でなかった。三千の選句、それも寝たきりの重病人である。ぞっとせざるをえない。疲労の深さが、蒲団のなかに埋めきれない苦痛となる。その身で、やっと二つの柿に、疲れ乾いた口中をなぐさめるのである。大きい仕事をしたあとの身の^{ほて}熱りが、柿の冷

たさによって表現される。この「柿」に冷めたを感じない人があるなら、かれは俳句的音痴だとい
ってよろしい。

[コメント]

新聞の俳句のコーナーを担当していた子規は、新聞に投稿された 3000 の句の審査をしていた。こ
の本の著者の小西甚一先生は、大学生の 1000 枚の答案を採点。2 人の共通体験が面白い。ともに教
師としての教え子への愛情が感じられる。

— 2014 年 11 月 2 日 林 明夫記 —